一宮市博物館だより

No.57 2016.3

もくじ

企画展「尾張洋画入門」 …… 2･3
博物館アルバム（平成27年度後期） …… 4･5
文化財保護事業　木造不動明王立像（地蔵寺蔵） …… 6
木造進叟禅師坐像（耕雲院蔵） …… 7
新発見の埋蔵文化財 …… 7
平成28年度催し物のご案内 …… 8

藤井外喜雄「石運び」昭和58年（1983）館蔵　企画展「尾張洋画入門」より

企画展

尾張洋画入門

平成28年5月21日(土)～6月26日(日)

「洋画」とは、西洋から伝わった技法や画材を用いて描かれる絵画です。近代以前にも西洋風の絵画が試みられた例はありますが、本格的な移入は、明治九年(一八七六)開設の工部美術学校においてイタリア人画家フォンタネージ(一八一八～八二)が画学教師を務めたことに始まります。

その後、ここ尾張地域にも東京で学んだ画家たちによって徐々に洋画が広がりを見せていきます。特に、野崎華年(一八六二～一九三六、名古屋市出身)と鈴木不知(一八七〇～一九三〇、現名古屋市出身)は、それぞれ東京で学んだ後帰名し、明治四十四年(一九一一)の東海美術協会の創立に立ち会うなど、この地域の洋画界の草分け的存在といえます。

大正時代に入り、その頃の東京では、岸田劉生(一八九一～一九二九)を中心とする草土社が結成されるなど、若い画家たちによる新たな動きが起こっていました。その草土社の名古屋展が大正六年(一九一七)に開かれ、尾張の画家たちにも大きな刺激をもたらしました。この三日間の展覧会に連日通ったという大澤鉦一郎(一八九三～一九七三、名古屋市出身)は、宮脇晴(一九〇二～八五、名古屋市出身)、藤井外喜雄(一九〇一～九四、石川県出身)らとともに「愛美社」を結成します。愛美社はわずか三回の展覧会を開いたのみで自然解散となりますが、その間には大正七年の第十二回文展で藤井が初入選、大正九年の第二回帝展で宮脇が初入選するなど、後の飛躍の土台となりました。

愛美社の短い活動の後、大正十二年(一九二三)には、鬼頭鍋三郎(一八九九～一九八二、現名古屋市出身)、松下春雄(一九〇三～三三、名古屋市出身)らが「サンサシオン」を結成します。鬼頭と松下は明治銀行に勤める先輩・後輩の間柄で、美術学校で学んだ経験もありませんでしたが、大正十三年の第五回帝展でともに初入選、後に上京して帝展などで活躍していきます。また、サンサシオン展は、吉田(三岸)節子(一九〇五～九九、現一宮市出身)や杉本健吉(一九〇五～二〇〇四、名古屋市出身)などの出品もあり、公募展には千点近い応募が集まるなど大規模化し、第十回で発展的に解散することになります。

一方、東京美術学校で学んだ尾張出身の画家には、佐分眞(一八九八～一九三六、名古屋市出身)、伊藤廉(一八九八～一九八三、名古屋市出身)、荻須高徳(一九〇一～八六、稲沢市出身)らがいて、卒業後にはフランスに渡り、西洋の絵画を直接摂取しました。伊藤は昭和四十一年(一九六六)の愛知県立芸術大学開学に尽力し、その指導のもと県芸大は愛知県における美術の拠点として発展していくことになります。

◇

本展では、近年の新収蔵品を中心に、尾張地方における洋画の展開を振り返り、身近な郷土の画家たちの足跡をたどっていきます。

(成河 端子)

①藤井外喜雄《ベナレスの沐浴》

③佐分眞《腰掛ける裸婦》昭和7年(1932)頃

②藤井外喜雄《開門前のルーブル美術館》昭和31年(1956)

⑤宮脇晴《ミルクを飲む幼児》昭和28年(1953)

④宮脇晴《赤のあやつり》昭和41年(1966)

⑦鬼頭鍋三郎《白桃とプラム》

⑥鬼頭鍋三郎《鉄仙花》

①～⑥当館蔵
⑦一宮市三岸節子記念美術館蔵

特別展

浮世絵展　描かれた風景

▼平成27年10月3日(土)～11月23日(月祝)

歌川広重（一七九七～一八五八）の「保永堂版　東海道五拾三次」全五十五図および変わり図六図などの浮世絵版画作品全六十三点を展示しました。当館では初の浮世絵展ということもあり、近隣・遠方を問わず、浮世絵に関心のある方々に当館の存在を知っていただく機会になりました。

■はじめての浮世絵鑑賞講座

■講演会
「広重の風景版画 魅力のからくり」

■講演会
「広重えがく ――臥遊の愉しみ――」

関連イベント

■講演会「広重の風景版画 魅力のからくり」
10月18日(日)
講師／神谷 浩氏
（国際浮世絵学会常任理事・名古屋市博物館副館長）

■講演会「広重えがく ――臥遊の愉しみ――」
11月8日(日)
講師／前田 詩織氏（中山道広重美術館学芸員）

■はじめての浮世絵鑑賞講座（学芸員による展示解説）
10月11日(日)、11月1日(日)、15日(日)、22日(日)

■たいけんの森「かんたん浮世絵」
10月～12月の毎週土・日曜日、祝日

玉堂記念木曽川図書館　特別展

宮脇晴と宮脇綾子 愛のまなざし

同時開催

川合玉堂 自然へのまなざし

▼平成27年10月9日(金)～11月11日(水)

一宮市博物館収蔵品の中から新収蔵品を中心に、三人の芸術家それぞれのまなざしを感じられる作品を紹介しました。展示作品は、宮脇晴（一九〇二～八五）の洋画・素描など十八点、宮脇綾子（一九〇五～九五）のアプリケ作品八点、川合玉堂作品九点でした。

関連イベント

■学芸員による展示解説（全九回）

■宮脇綾子の作品

■玉堂記念展示室

博物館キッズクラブ

平成十八年度から開始したこのクラブも、十年目を迎えました。今年度は八人のクラブ会員とともに様々な活動を行いました。恒例となった夏のバスツアーでは他地域の歴史や文化に触れる一方、博物館のワークショップではクイズや体験を交えながら資料をより深く鑑賞する方法を学びました。

■6月14日(日)第一回「博物館マスターになろう」
■8月2日(日)第二回「三重県の博物館・美術館ツアー」
■10月25日(日)第三回「浮世絵展を見よう！」
■3月19日(土)第四回「墨会館を探検しよう」

■「浮世絵展を見よう!」

文化財パトロール▼平成28年1月15日(金)
文化財防火訓練　▼平成28年1月22日(金)

昭和二十四年一月二十六日に奈良・法隆寺金堂が炎上し、堂内の壁画が焼損しました。以来、この日を「文化財防火デー」と定め、防災意識の高揚のため各種行事を開催しています。

市教育委員会は消防本部とともに、一月十五日に文化財管理者宅での防火指導や防火用設備等の点検をする文化財防火パトロールを実施しました。

また一月二十二日には、大和町の妙興寺境内において、仏殿からの出火を想定した文化財防火訓練・文化財管理者研修を実施しました。

■妙興寺での防火訓練

企画展

2016 一宮市現代作家美術秀選展

▼平成27年11月28日(土)～12月13日(日)

平成二十七年に開催された第七十三回一宮市美術展の成果等をうけて、一宮市美術展市長賞受賞作品、各協会に所属する現代作家などの選りすぐりの作品を展示しました。

■平成27年度展示風景

企画展

くらしの中の民具 むらのおまつり

▼平成28年1月9日(土)～3月13日(日)

市内の小学校三年生全員が見学に訪れるこの展覧会も二十五回目となりました。今年度は「むらのおまつり」をテーマに、祭礼の記録映像や芝馬祭の芝馬、黒岩川祭りのオクリブネなどの祭礼用具を展示しました。関連イベントも盛況のうちに終了し、たくさんの子どもたちの声を聞くことができました。

関連イベント

■1月17日(日)
「もちつき大会」

■1月24日(日)
「むかしのこどもにへんしん!」

■2月7日(日)
「本格たこづくり」講師／澤木 寛氏（日本の凧の会 尾張一宮支部 会長）

■2月21日(日)
「むかしのおやつ・せんばやき」

■たいけんの森「三凧&こまづくり」
1月～3月の毎週土・日曜日、祝日

■「むかしのこどもにへんしん!」

市民文化財めぐり

▼平成27年11月5日(木)

市民の皆さんに、郷土の貴重な財産である文化財を紹介して、先人を偲び、文化財愛護の精神を高めていただくために、昭和四十二年以来毎年「市民文化財めぐり」を開催してきました。

今回は、石刀神社～伊冨利部神社～堤治神社～頓聴寺～美術館～博物館というコースを巡りました。

民俗芸能公演

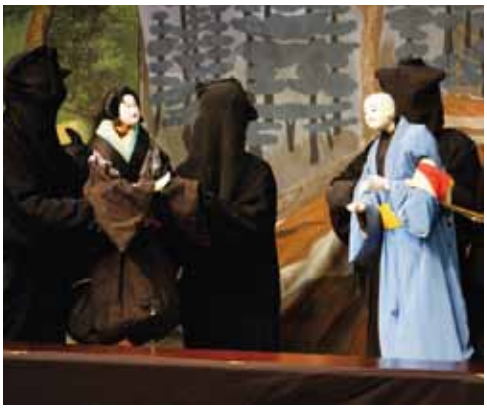
一宮市域には、江戸時代より続く伝統芸能や祭りが伝承されています。博物館では、民俗芸能の普及のため、毎年公演を行っています。

内容

■1月31日(日)
市指定無形文化財「島文楽」

■2月14日(日)
市指定無形文化財「宮後住吉踊」

■2月28日(日)
県指定無形民俗文化財「ばしょう踊」



■島文楽「壺坂霊験記 山の段」

博物館講座

尾張平野を語る20～信仰の歴史と民俗～

これまで、本講座では歴史のみならず自然環境や民俗文化など様々な分野から講師を招いて、講演会を開催し、尾張平野の特徴について考えてきました。

二十回目となる今回は、この地域に展開した様々な信仰の歴史と人々の関わりについて考えました。

内容

■3月6日(日)
「尾張から日本三霊山の大巡礼「三禅定」の旅の歴史」
講師／加藤 基樹氏（富山県「立山博物館」学芸員）

■3月13日(日)
「尾張の陰陽師・方歳師・修験者」
講師／林 淳氏（愛知学院大学教授）

■3月20日(日)
「尾張平野の寺院・村・門徒」
講師／蒲池 勢至氏（同朋大学仏教文化研究所客員所員）

古文書講座

平成二十七年度で二十四回を迎えた古文書講座。五月から二月まで全十回の講座を開催しました。今年度は「田所村小島家文書」をテキストとし、グループ内で、読み合せをするなど、楽しく学んでいました。

受講生募集のお知らせ

古文書講座～古文書にしたしむ～
平成28年5月～平成29年2月

一宮市博物館保管の江戸時代の村方文書を中心とした解読、およびその歴史的背景について学びます。（詳細は市広報4月号、ホームページ参照）

■平成27年度講座風景

文化財保護事業

一宮市では一宮市文化財保護条例に基づき、文化財の指定を行ったり、指定文化財の管理修理等の保存活用に要する経費の一部に対して、補助金を交付する等の保護活動をしています。ここでは平成二十七年度に保存修理を行った文化財の中から、地蔵寺（本町通）所蔵の木造不動明王立像と耕雲院（大和町）所蔵の木造進叟禅師坐像を紹介します。

木造不動明王立像（市指定）

地蔵寺（本町通）蔵
桧材、割矧造、彩色、玉眼
総高一四〇・五㎝、像高八一・八㎝

不動明王は密教の尊格であり、忿怒の相を以て煩悩を打ち砕き、衆生を教化する性格を持ちます。

本像は右牙を上に、左牙を下に出した忿怒相に表しています。巻髪は大粒で、頭上に莎髻と呼ばれる髻を表し、辮髪を左肩に垂らします。腰を右に展ばして岩座に立ち、右手に三鈷剣、左手に羂索を持しています。また火焔光背を備えています（写真1）。本像は、密教の根本経典「大日経」の注釈書である「大日経疏」の記述に沿っており、不動明王の典型的な像容と言えます。

頭躰幹部は桧の一材からなり、造像過程で耳の後ろ前後二材に割って内刳を施した後、再び矧ぎ付ける割矧造と呼ばれる技法を用いています。さらに頭部は首の付け根で一度割り離し、目尻辺りを通る線で面前部も割り離しています。この面割りの際に、面裏側より玉眼が嵌め込まれます。両腕は各一材、右手首先と両足先も別材を矧ぎ付けています。装飾として表された臂釧・腕釧・足釧は、銅製でいずれも鍍金が施されています。

修理前では全体に埃が付着し、干割れや虫孔、彩色の浮き等、経年による劣化が各所に見受けられました。特に脚部の枘に対し、台座の枘穴が浅く安定性を欠いていた他、持物の剣は枘穴が緩み、脱落の恐れがありました。そこで全体のクリーニングをはじめ、矧ぎ目や枘穴の緩みを調整して、各部の脱落を防止しました。台座については、補材を用いて枘穴高が合うよう整えました。また彩色部分は膠や樹脂による剥落止めを行い、全体を古色に仕上げました。後補の羂索は綱部分の材質を銅線から絹に変更し、欠損していた分銅も新たに制作する等、見目麗しくなりました。

さらに今回の修理では、頭部内刳から摺仏の納入品が見付かりました（写真2）。摺仏は薬師如来坐像一枚、不動明王立像二二一枚と膨大で、紙の大きさも統一されていません（写真3）。納入品を取り除いた内刳面には墨書も確認されました。

（天野 歩）

写真1 木造不動明王立像

写真2 木造不動明王立像（背面）

写真3 木造不動明王立像納入品

木造進叟禅師坐像（市指定）

耕雲院（大和町）蔵
桧材、寄木造、黒漆塗彩色仕上げ、玉眼
総高七六・六㎝、像高五四・七㎝

進叟禅師は妙興寺住持ののち耕雲院を開き、嘉吉元年（一四四一）に亡くなりました。

本像は法衣と袈裟を着け、右手掌の上に左手を乗せる禅定印を結びます。この印相は釈尊が瞑想に入っているときに由来し、定印とも呼びます。背もたれと肘掛が付いた曲彔（僧侶が座る椅子）に趺座しています（写真4）。さらに沓と沓置台が付きます。顔貌は厳しく、眼孔は窪み、頬はこけています。また張り出した後頭部と大きなのどぼとけが目立ちます。

材は桧で、寄木造と呼ばれる技法を用いています。先述した割矧造が像の主要部を一材から彫出するのに対し、寄木造では複数の用材を寄せて造ります。この技法は小木で巨像を造像することができることが特長であり、平安時代後期に完成しました。

本像は首から上を別材とし、襟内で差し込んでいます。さらに頭部は耳の後ろを通る線で前後二材を矧ぎ付け、内側より玉眼を嵌め込みます。躰幹部は前後二材矧ぎとし、内刳を施しています。両腕はそれぞれ竪一材、両脚は横一材、垂下する法衣と袈裟は上下二材からなります。沓と沓置台は各一材で造られています。曲彔も桧材であり、黒漆塗り仕上げ、一部に朱漆が施されています。

地蔵寺像同様、経年による劣化の進行が見受けられたため、全体の埃の除去、各所の補修・補彩を行いました。特に法衣と袈裟の一部、袈裟を吊る八角環の欠損部分を新材で整えました。また曲彔は各部の組み付けが緩んでいたため、補材を用いて安定性を確保しました。

記銘は既に確認されている像底の「天明二壬寅」、即ち一七八二年の銘のみでした。

（天野 歩）

写真4 木造進叟禅師坐像

参考文献

「一宮の文化財めぐり」増補改訂版
一宮市教育委員会、一九九九年
※各像の法量は今回の調査結果を反映しており、右記文献と一部数値が異なります。

新発見の埋蔵文化財

一宮駅から南東に二・五㎞離れた場所にある馬見塚遺跡からは、縄文土器を二つ合わせた中に死者を納めて埋葬する土器棺や、土偶や石棒などの縄文時代の祭祀で使われた道具が見つかっています。

この馬見塚遺跡から、二〇一五年十二月に行われた住宅工事の立会で、縄文時代晩期（約三〇〇〇年前）の縄文土器と石棒が出土しました。石棒は男性器を象った石器であると考えられています。今回、石棒が発見された場所から南西に五十mほど離れた場所でも、一九六二年に石棒が発見されています。この時の調査では、石棒と共に土偶も出土しています。男性をモチーフにした石棒と女性を模した土偶が同じ地点から見つかっているという事実は、縄文の人々が考えた男女像を知る上で重要です。

（藤井 雅大）

■石棒

■縄文土器

平成28年度 催し物のご案内

※都合により、変更又は中止になる場合があります。詳細は市広報、公式ウェブサイト、または博物館までお問い合わせ下さい。

展覧会

- 企画展　尾張洋画入門　▼5月21日(土)～6月26日(日)
- 夏季小展示　土の中のいちのみや　▼7月16日(土)～8月21日(日)
- 企画展　2016一宮美術作家協会展　▼8月27日(土)～9月11日(日)
- 企画展　一宮写真協会選抜写真展　▼9月15日(木)～9月25日(日)
- あいちトリエンナーレ2016関連事業 モバイル・トリエンナーレ　▼9月16日(金)～9月19日(月祝)
- 特別展　三英傑とともに歩んだ浅野長政　▼10月8日(土)～11月27日(日)
- 企画展　2016一宮市現代作家美術秀選展　▼12月3日(土)～12月18日(日)
- 企画展　くらしの道具　▼1月14日(土)～3月20日(月祝)

講座・公演

- 講座　尾張平野を語る21　▼2月予定(全4回)
- 公演　民俗芸能公演　▼3月予定(全3回)

平成28年度　たいけんの森講座案内

わくわく体験

●日時　毎週土・日曜日・祝日　午前9時30分～12時　午後1時～4時30分

4月～6月	ぬりえ
7月～9月	じょうもんキーホルダー
10月～12月	花押スタンプ
1月～3月	ミニ凧&こま

じょうもんキーホルダー

はたおり・糸つむぎ体験

●日時　毎週土・日曜日　午前10時～11時30分　午後1時30分～3時

●協力　尾張もめん伝承会

一宮市博物館だより

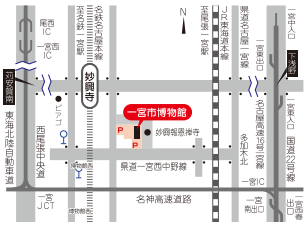
第57号

発行日／平成28年3月31日
編集・発行／一宮市博物館
印刷／三井堂株式会社

利用案内

[開館時間] 午前9時30分～午後5時（入館は4時30分まで）
[休館日] 毎週月曜日（ただし、休日にあたる場合は翌日に休館）、休日の翌日（ただし、土曜日・日曜日または休日の場合は開館）、年末年始（12月28日～1月4日）
[観覧料]

		一般	高校・大学生	小・中学生
常設観覧料	個人	200円	100円	50円
	20人以上の団体	160円	80円	40円
博物館パスポート（年間観覧券）		800円	400円	200円
常設展示共通観覧券		400円	200円	100円
ミュゼカード（年間共通観覧券）		2,000円	1,000円	500円



[交通アクセス]
名鉄名古屋本線「妙興寺」駅下車南口より徒歩7分
「一ニコ」ふれあいバス「博物館西」下車徒歩5分

〒491-0922　愛知県一宮市大和町妙興寺2390番地
TEL0586-46-3215　FAX0586-46-3216
URL http://www.icm-jp.com/

※未就学児および市内の小・中学生は無料。市外小・中学生は土曜日無料。
※市内在住の満65歳以上で、住所・年齢の確認できる公的機関発行の証明書等を提示された方は無料。
※身体障害者手帳・戦傷病者手帳・精神障害者保健福祉手帳・療育手帳を持参の方（付添人1人を含む）は無料。
※博物館パスポートおよびミュゼカードは、発行から1年間有効。
※博物館パスポートは一宮市博物館の常設展示および特別展示を有効期間中何度でも観覧できます。
※常設展示共通観覧券は、一宮市博物館および一宮市三岸節子記念美術館の常設展示を、施設ごとに1回まで観覧できます。有効期限はありません。
※ミュゼカードは、一宮市博物館および一宮市三岸節子記念美術館の常設展示および特別展示を有効期間中何度でも観覧できます。

[特別観覧料] 特別展示の観覧料はその都度定めます。
[無料ゾーン] 展示ホール・たいけんの森・ギャラリーは無料で観覧いただけます。